

シェリングに於ける Natur in Gott の概念

——「自由論」に於ける悪の問題——

阿 部 行 人

序

悪の問題は、一方に於て人間の道徳的意識に關聯しつゝも、また他方に於て人間の自然・本性に深く繋つてゐる。けれども若し此の自然・本性に於ける悪を固定的に考へ、悪を何等かの意味に於て宿命的なものに解すれば、意志の自由や、我々の道徳的向上への努力は無に歸するであらう。併しまた、悪は當然に道徳的な悪なのであるから、善と同じ次元に立つて善と對立し、従つて我々の善への努力によつて克服せらるべきものであるとのみ考へるならば、他面、それにも拘らず、善とは異質な基盤に立つ悪、従つて善原理を以てしても猶超克し得ざる悪が残り、其處に宗教的な救済・恩寵を俟たねばならぬといふ矛盾が生ずる。例へばカントは宗教を理性の

限界内に於て解釋し、悪を徹頭徹尾道徳的な立場で捉へながらも、善原理の把持のみでは根本悪を克服しきれず、悪を棄却するためには、結局神の恩寵を認めざるを得なかつた。^④茲に我々は、自由の問題・悪の問題が、宗教と道徳との二つに跨つてゐることを、また其の限りに於ける解決の困難さを見出すのである。それと關聯して今一つ、悪の問題を扱ふ場合には、神とそれとの關係も問題とならざるを得ない。何故なら、悪を神から切離して考へれば單なる二元論に陥るのであらうし、神の中に悪の存在を許せば、神の最高完全性は破壊されるだらうからである。かうした悪の根源の問題、人間の自由の本質、及び神とそれ等との關係を論じたものとして、シェリングの「自由論」(Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit 1809)

が、極めて特異な地位を占めるのは、周知の處であらう。自由論は、ヘーゲルが精神現象學(1807)で述べた「同一哲學」への非難に對する或る意味での反駁の書でもあり、また、此の前後を契機として、神祕主義的な傾向の極めて濃い彼の最後期の哲學へと移つて行く、その轉回點を爲してゐるが、今この自由論が特に注目される所以を考へるならば、次の諸點が擧げられる様に思ふ。

一、シェリングの場合、神のうちにあるもののみが自由なのであるが、而もその自由は自立的な自由であり、人間的自由は、いはゞ神のうちにある人間が自己自身であることの自由である、従つてかゝる自由概念は、「善をも悪をも爲し得る能力」として、その中に、神への叛逆・悪への自由を必然的に包含してゐること。

一、悪が、神自身の内にあつて而も神ならざる「神のうちにある自然」といふ、独自の概念から導かれてゐること。

一、シェリングの神觀は、汎神論的であると共に人格神論的であり、神は生ける神として極めて lebendig であり、また「無底」よりの發展を神の自己顯示であるとして、全般に汎意論(Panvolutarismus)的な色彩が濃いこと、さうして悪が、神の絶對的顯示たる愛

の前には無力であり、畢竟愛に歸一せられねばならぬと説くこと。

以上擧げた諸點に就ては、ヤコブ・ベームの神智學の影響を極めて強く受けて居り、それと全く軌を一にしてゐる箇處も少くないのであるが、此處に私は、折にふれてそれを参照しつゝ、シェリングに於ける悪の問題——特に、今は「神のうちにある自然」の概念を中心として、なほ若干の検討とを批判とを加へたいと思ふ。

*ヘーゲルの同一哲學に對する非難は、「その中ではすべての牛が黒くある夜」と難じた如く、個物を *an sich* に無媒介的に見ること、従つて單に非現實的に見ることへの非難であつた。「自由論」は、これに對する或る意味での應答と考へられる。即ち、ヘーゲルの立場では、現實のものが如何なるものかを説明し得ても、如何にしてかゝるものがあるのかは説明し得ない。ヘーゲルの哲學は、如何にあるかの問題であり、そのものについての本質・概念の問題であるが、反之、シェリングのそれは、あるといふことについての説明の問題、事實そのもの問題である。所謂、單に *ideal* な *Was* の問題ではなくして、*real* な *Daß* の問題である。(西谷啓治氏シェリングの自由意志論一四頁参照) *Was* にまさる優位を *Daß* に興へること、——この傾向は、本稿のテーマである *Natur in Gott* に於て、まさしくあらはれるのであるが、それはまた、當然に、理念の世界からは説明し

得ぬ非合理主義と密接に關聯する。シェリングに於て、神に於ける非合理的原理がそのプリウスとして、神の存在に先行するものとして解されることによつて、非合理主義の構成は最も注目すべきものとなつたのである。

① Kant; Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft.

② マーテンセンは、シェリングの自由論は、すべてペーメに負うてゐるが、その象徴的な語法のモデルの上に形造られてゐることを述べてゐる。(H. L. Martensen; Jacob Boehme, tr. in English, p. 35)

③ Tillich; Mystik und Schuldbewußtsein in Schellings philosophischer Entwicklung, S. 103.

—

自由論では、惡の一般的始元を論ずるに先立つて、先づシェリングは、同一哲學が必然的にさうである汎神論の立場で、これと自由との關聯を考へてゐる。しかし、彼を汎神論者として扱ふことについては、固より若干問題があらう。といふのは、若し汎神論がアコスミックな性格を伴ひ、従つて、萬物が神の中に還没し去つて、全く個別性が失はれるのであるとすれば、シェリングは、むしろかゝる汎神論を越えなければならなかつたからである。シェリングの汎神論は、——若しそれが汎神論とい

ひ得るならば——何よりも先づ、個別性を生かす汎神論でなければならぬ。普通に汎神論は、宿命論として、個別性の否定として、また自由の否定として考へられる。即ち其處では、個人的自由は、最高存在者の特性たる全能と矛盾する形で現れる様に考へられ、「唯一存在者に於ける絶対的因果性は、他の一切の存在者に、たゞ無制約なる受動性を残すのみ」^①となるのである。併しながらシェリングによれば、個物を否定するが如き汎神論は眞の汎神論ではない、否、むしろ汎神論とは最も隔つたものといへるであらう。汎神論と自由とは矛盾しないのみならず、眞の自由の體系は汎神論であるべきであり、自由なるものこそ、神のうちに在るべきである。例へば、有機體の一部は、その全體に於てのみ可能でありつつ、しかも生命を持ち、且自由なのであり、逆に全體から切離されたならば、生命も自由も失ふであらう。それと同様に、絶對者に依存的なるもの、神に歸結するものが、自立的であり、自由なのである。凡そ無制約的であるのは、たゞ絶對的なるもの、或ひは神のみであり、自由であるといふことは、畢竟自己自身であること、unabhängigであること、無制約的であること、従つて神のうちにあることである。「絶對者からあらゆるもの

が生ずる。それから生ずるものは、神的なものあらはれであり、『神の自己顯示』であり、絶対的なものの性格は、導かれたるものの性格によつて止揚されない。『被導出的なる絶対性、或ひは神的性格といふ概念は、矛盾であるどころか、むしろ哲學全體の媒概念である。かゝる神的性格が自然に與へられてゐるのである』^②神のうちには於ける凡てのもの、内在の教説、即ち此の意味での汎神論と自由の概念とは矛盾しない、寧ろ自由は汎神論とのみ一致する。それは、可能であるのみならず、必然的でもある。眞の理性體系、眞の汎神論は同時に自由の體系である」^③

かゝる體系は、固より最早スピノーザのそれではない。スピノーザの汎神論は單なる實在論であり、Substanzの抽象的把握であつた。シェリングによれば、スピノーザ哲學の缺點は、それが宿命論に陥いるとか、または自由の否定となるからといふ様な點ではなく、「萬物を神のうちに置くことに在るのではなくして、それが萬物であることに在る」^④——即ち、單に固定的・一面的な實在論であることに存する。スピノーザが諸物の本性の中の自由を否定したのであれば、それは、決して合理論的・汎神論的な性格から出て來たのではなくして、彼の

教説の自然論的・機械的性格から生じたものである。シェリングにとつて、同一哲學を完成せしめると共にそれを批判的に超えることは、スピノーザ主義を離れること、否、スピノーザ主義を補ふこと、シェリング自身の言葉を藉りて言へば、「スピノーザ主義に愛の息吹を吹き入れる」ことであつた。今やシェリングの神は、固よりフイヒテに於けるが如き「自然なき神」ではないが、又スピノーザに於けるが如く、「自然と同一に見られた神」でもない。シェリングに於て何よりも先づ重要なのは、同一なるものの力動的な姿、神の發展的な性格である。神は死にたるものの神にあらず、生ける者の神でなければならぬ^⑤。また、諸々の存在者が、神から歸結するその仕方、決して機械的な仕方であつてはならない。生ける者の神とは、生ける神、lebendig な神であり、さうして此の場合、lebendig な神とは、persönlich な神なのである。一般には通用し難い Pantheismus と Theismus との結合は、既に述べた如く、シェリングの特色の一つであるが、それはまた、natural mysticism の特色でもあらう。諸家の言ふ如く、ベームに於てもかゝる二面を有してゐたのであるが、その教説はまた、スピノーザの體系を補ふ位置に在るとも普通に言はれてゐる^⑥。即ち、

スピノーザが、有限なるものの永遠に一なるものへの還歸を説くとすれば、ペーメは逆に、永遠に一なるものから有限なるものへの出現を示すものといはねばならない。

従つて、ペーメの神は、發展し顯示するものとして、動力的な契機の全體でなければならなかつた。自由論研究期に於けるシェリングは、まさしくペーメの此の方向を受け繼いだものと言へるであらう。後に述べる如く、ペーメの場合、神は無であり、一切であり、唯一の意志であり、自己自身の中に自己を捉へ自己を見出し、神から神を生む、自己顯示 (Selbstoffenbarung) の神であつた。神は、キリストに於て、智慧に於て、^{***}Wort に於て、自らを顯示し、^{***}verwirklichen する。同様に、シェリングに於ても、神は萬物の説明根據である。「神からの萬物の歸結は、神の自己顯示である。然るに神は、彼に似たものに於てのみ、即ち自己自身のうちから行動する自由な存在者に於てのみ自ら顯はとすることが出来る。かゝる存在者の存在には、神以外に如何なる根底もないが、彼等は神があると同様にるのである。神が言ひたまふと、もう彼等はそこにある。」——此の場合我々は、次の二つのこと (さうして二つともペーメと殆ど共通なのであるが) に氣付くであらう。即ち、一は、萬物の神か

らの歸結を以て神の自己顯示なりとする汎意識主義 (Pan-voluntarismus) の傾向であり、今一つは、それと關聯して、神のうちにある個物に全く獨立性を認めないのでなくして、むしろ、既述せる如く、汎神論こそ、萬物の根柢に神より獨立なるものを認めるといふ、いはゞ個性主義的な傾向である。個物は、神のうちに内在しつつ、しかも自ら獨立して自己以外に何等制約を受けぬ。——さうしてかゝるものに於てこそ、神の自己顯示が可能なのであるが——シェリングにとつて、それが即ち自由といふことであつた。

* ペーメはいふ、子は常に父の中にあり、人間となる。終なく本體なき聖なる三は、一つの本體に於ける一形象となつて顯示する。それがキリストである。我々は、キリストの肢體である。我々は神々であり、それ故にキリストのうちにある。」^⑤ 聖なる三とは、父と子と靈であるが、それらは光の發展と共に、永遠に生み出す力であり、本體をもたらしはするが、それ自身は本體ではない。(ペーメは、「神は、それが神とよばれる以上、如何なる本體でもなくして、本體に對して丁度一つの無としてある」と言つてゐる。) それらは本體——先づ第一にキリストに對して從屬關係に立ち、キリストの爲に身を捧げ、盡力することに努めるものとしてあるのである。

* 「神は永遠なる智慧の意志であり、智慧は神の顯示であ

る」^⑩
 ***「神性の永遠なる意志が、その独自の根底から、如何にして尊嚴の光の中に自らを顯示して行くかを理解すべきである……此の場合、二つの道がある、第一は言葉の中心への道、第二は、言葉の光及び現はれへの道である」

シェリングは、自由については、既に「哲學と宗教」に於て、「自己自身によつて限定されてゐる、まさにこの事が自由の概念である」と述べてゐる。彼の自由は、かゝる自己限定的な、自律的な、といつてもそれは意志の領域のみに限られることなく、個別が個別である限りに於ける自由、いはゞ實存的な自由である。^{*} 個別は常に普遍のうち在り、普遍より現はれ、また普遍に *recoi* される一面を持つ。が、それと共に、個別は自己自身である限りに於ける自由を持つ。それはいはゞ普遍に對して反逆的な、自己中心的な自由であらう。従つて、かゝる自立的なる自由を主張する限りに於て、シェリングの自由には、神への離反・惡への積極性が包含せられてゐたのである。「神のうちにあるこそ自由である」——しかしそれは、例へばヘーゲルの説いた様な、神の觀念に於ける自由の如く、——ヘーゲル自身には現實的な、併し事實抽象的な——「考へられたる」自由ではなく、ま

たカントに於けるが如く、神の命たる道德律を己が格率としてとることと於てある自由、いはゞ善へのみ向つてある自由ではなくして、惡に對しても積極的に動き得る自由、即ち「善と惡との能力」である自由であり、さうしてそれ故にこそ、「實在的な、そして生きた自由概念」なのである。

*ヤスバースも、シェリングがドイッ觀念論に實存的な道を開いたことを認めてゐる。たゞ自由が實存的な性格のものである場合には、自由に於ける決意性が重要な問題となる。(例へば、ヤスバースの場合に於ても然りである。)シェリングに於ては、自由な行爲は、必然的に限定された行爲として特定な人間の睿智の本質を限定する處の絶対的必然性と絶対的自由との合一を考へるが、(此の點は、フィッシャーの言ふ如く、無限定的な睿智の本質を考へたカントとは異なるシェリングの特色である。)^⑪ それは、或る意味では、自由の決意性とながるものがあらう。何故ならば、内的必然性が直ちに自由であり、人間の本質は、彼自身の行なのであるから。またそれ故に根本惡の概念が成立するのである。(但し、此等については別に述べることにしたい。)猶、ベームに於ては、後述する如く、*unfashion* な *Ungrund* としての意志が、志向性を得て、自らを把握せる・決意せる (*gefasst*) 意志となり、その *Fassung* の故を以て、欲望から自由である

といふ様な表現を用ゐてゐる。

處でかゝる汎神論と自由との兩立が可能となるためには、そして又、その自由概念がレアルな生きたものとしてある爲には、第一に注意すべきは、シェリングの所謂、機械的自然觀としての實在論と、「一面ではたゞ最も一般的、他面では單に形式的な自由概念を興へる」¹⁰處の觀念論との交互浸透・融合統一を必要とするといふことである。併しかゝる統一は、ヘーゲルに於ける辯證法的統一、合理主義的・論理的統一であるよりもむしろ、意欲によつて貫かれた動的な統一であつた。主意主義的傾向、動的思想は、(同一哲學時代に於ては寧ろ弱められてゐたにしても)もとゞ／＼シェリングに於ける根本基調の一つだつたのである。「最後のまた最高の所から判ずれば、意欲より外の何物もない。意欲が根本存在である。そして意欲に對してのみ、根元存在のすべての述語、即ち、根柢なきこと(Grundlosigkeit)、永遠なること、時間からの獨立、自己肯定などが妥當する」のである。かくして Wollen は、根柢なきもの、無底(Ungrund) 或は元底(Urgrund)に繋がるのである。周知の如く、ベームは「神性の最初の状態を Ungrund に於て考へた。さうして一切のものは、その根柢の深

く極まる處では、Ungrund 或は Nichts の上に立つ。

——即ち、他の如何なるものにも依存せず、自由である。従つてそれ等は、神によつて、神の如き自由を持つものとして生み出されたのであり、意志に於ては、人間は神と同様に自由である。それ故に、「神が人間の墮落を欲し給うたのではない、——寧ろ、人間の意志精神が、此の場合、神そのものとして自由なのであるが、自ら進んで、意見を支配せんとする鬭争に陥るのである。」¹¹否、それ處か、ベームは、神の状態が人間の意志決定の如何に依るときへ述べてもゐるのである。「神は、あらゆる事物のうちにて、事物の意志及び特性のあるが如くにある。といふのは、一つの特性は、他の特性を可能にするから。靈が自ら内に向ふ時、その欲する處を、神もまた欲し給ふのである。」¹²そして自由がかく自立的であるのは、唯それが神のうち内に存在する限りに於てのみであり、さうしてかゝる自由が、惡への積極性を含む現實的な生ける自由として存在する。其處に於て個體が自らの人格性を完成させることを伴ふのであり、またそれと共に、已にカントに於て問題となつた處の、根本惡・人間の叡智的行爲・惡からの救濟等が、シェリングに於ても、新しく問題にされねばならぬのである。

汎神論と自由との兩立について第二に注意すべきは、かく、自由なるものは神のうちに内在することによつてのみ可能であり、悪の可能性なくしては現實的な自由はないとすれば此處に、悪の根源との關係について、何等かの説明を必要とするといふことである。しかもシェリングの場合、悪を善と *wirklich* に對立せしむるもの、或は善の制限乃至は缺如と見るが如き消極的な説明をなし得ないとすれば、(悪は *wirklich* であり *lebendig* であるが故に) 神の最高完全性を破壊することなく、また悪の自由を奪ひ去ることなしに、悪の根源を如何に説明するかの問題は、特に重要でなければならぬ。この場合、「悪が説明されるべきであり、しかも神からでもなく神の對立物からでもなく明らかにされ得るとすれば、尙、何が残つてゐるか。唯一の出路としてある様に思はれるのは、我々の問題に關し、内在と二元論との正しい合一である。悪は自由によつてのみ可能であり、神から *unabhängig* な根據を要求する。自由そのものは、たゞ神のうちにてのみあり得、たゞ神に於てのみ基礎づけられるが、悪の可能性は、神に於て基礎づけられるのではなくて、神でない處のあるものうちに基礎づけられる。此等の命題は變へられず、結合されねばならぬ。即ち

悪はそれ故に、根本的には、神そのものではないあるものが神のうちにある場合にのみ可能である。」かゝる、神そのものではないが神のうちにある自然、*Natur im Gott* について、我々は次に考察せねばならぬ。

- ① Schelling; *Menschliche Freiheit* (Werke IV S. 231)
- ② ” ; S. 239
- ③ K. Fischer; *Geschichte der neuern Philosophie* 7. S. 635
- ④ Schelling; *Menschliche Freiheit* S. 241
- ⑤ ” ; S. 233
(『ライプニッツ』二二一―三三三)
- ⑥ H. Petersen; *Grundzüge der Ethik Jakob Böhme's* S. 9
- ⑦ Schwegler; *Philosophie der Geschichte im Umriss* § 23, 6. J. Böhme (岩波文庫 西洋哲學史 上 三三―三四) 及び Hegel; *Geschichte der Philosophie* 3 Theil S. 288 並に S. 368 參照 (Gans版)
- ⑧ Schelling; *Menschliche Freiheit* S. 239
- ⑨ Böhme; *Dreifaches Leben*, 13, 22.
- ⑩ ” ; *Myst. magn.* 43, 3.
- ⑪ ” ; ” 1, 2-4.
- ⑫ ” ; *Sex puncta theosophica* 1, 31.
- ⑬ Schelling; *Philosophie und Religion* (Werke IV S. 42)

他同様の語は Menschliche Freiheit, S. 276.

- ⑭ Schelling; Menschliche Freiheit S. 244.
- ⑮ Jaspers; Die geistige Situation der Zeit, S. 145.
- ⑯ ” ; Philosophie 2 Aufl. S. 449.
- ⑰ Schelling; Menschliche Freiheit 276.
- ⑱ Fischer; ibid., S. 655.
- ⑲ Schelling; Menschliche Freiheit, S. 244.
- ⑳ ” ; ” , S. 242.
- ㉑ Böhme; Sendbrief, 11, 51.
- ㉒ ” ; Sex puncta theosophica, 8, 29.
- ㉓ Fischer; ibid., S. 639.

II

先に述べた如く、シェリングの場合、自由そのものはたゞ神のうちに於てのみあり、又自由は神に對しても反逆し得るポジティブな自由であり、而もかゝる自由を媒介として、神は自己顯示を続け自らを現成して行く——此處に汎神論と自由との結合があつた。絶対者は發展する、神は人格的存在である。「神は、そのうちの觀念的原理と獨立である根柢との結合によつて最高の人格性である。」従つて神の自己顯示の中に於ては、「實在の根據」と「實在そのもの」の二つの要素が區別されねば

ならない。何故ならば、神の自己顯示は Nichtoffenbarsein から Offenbarsein にと現はれんとする、そして offenbar な神は、現實的な、顯はれたる、existent な神であり、隠れた暗い状態は、其處から神の現實性が現れ出る處の、必然的な永遠の制約として把握されねばならぬからである。併し一方、神の外に、また神の前には何物もなく、神の内に、又神から凡てのものが生ずる。従つて神の實在の根據もまた神そのものうちの中に在り得る、即ちそれが、神と分つべからざる、而も神とは區別された存在であり、「神のうちにある自然」なのである。此の概念によつて生ける神の發展が可能であり、同一哲學はいはゞ完成せしめられるのであるが、シェリングが暗に指した如く、またフィッシャーが言ふ如く、先づかゝる概念を認め、其處から神の内的生命を考へたのは、ベーメであつた。

ベーメの神智學は、神の存在の根源と世界及び罪惡の起源の發見の問題を第一に取上げる。従つて彼の體系は基本的には次の様な區分を爲し得る。(1)神は如何にして自らを生ぜしめたか。(2)何故に、また如何にして神は世界を作り、如何にして惡をその中に入れたか。(3)神は、如何にして墮落せる創造物の心の中に再生し得るか。それ

はブートローの言ふ如く、まさしく construction の問題であり、創世の問題であり、其處に於ては、自然は明らかに conscious な、free な、また acting な person であり、かくてベームの哲學は、personality の哲學だつたのである。それ故に、彼の場合、無が本質であり、究極の相であり、最初の源泉、即ち Ungrund と呼ばれる。そしてまた、ベームはそれを神性の最初の状態として考へてゐるのであるが、神は完結的なもの、乃至は抽象的な性質のものではなくて、創造する神でなくてはならない。Ungrund は總じて意志なのである。

「此の無底的な、把握し得ざる、非自然的にして非被造的なる意志は、——そのみが一者であり、その前にも後にも何物をも持たず、自己自身の中に於て唯一なるものであり、無として、凡てとしてあるのであるが——唯一の神であり、それは自己自身の中に自己を捉へ自己を見出し、神から神を生むのである。」^⑤ God self-caused ——之はベームに於ては、正しく具體的な積極的な意味を持つ。即ち、凡てのものは、自らを顯示せんとし、また自らを創造し得る生ける人格として示す原理から始められたのであつた。此等の點に於て、既に述べたシェリングの「生ける神」は、ベームとその方向を同じくする

ものと言へるであらう。

シェリングに於ても、實存と根底との以前に、究極的なものとして、元底 (Urgrund) 又は無底 (Ungrund) を立てる。それは凡ゆる對立に先行し、何等の述語をも有しない。Identität が對立するものの統一を意味するのに反し、それはすべての對立に對して gleichgültig な Indifferenz としてみ言ひ表はされる。と同時に、無差別なくしては二元性もまたあり得ない。かゝる無底が二つの元初に分れるのは、「愛の祕義」に於てあり、これまたベームに影響されるところ大であるが、之等の諸點については別に述べたい。

所でかゝる無の神が、人格としての神、創造者としての神に轉回する爲には、二分化がなければならぬ。恰も光が闇きものに反射する場合にのみ見えるが如く、總じて顯示には opposition を必要とする。そして、その對立に於ける矛盾と和解とを通じて、神の人格が實現されるのである。それが即ち、自らを顯示し出さんとする方向に對して自らの中に籠らんとする方向であり、作用的・顯示的なものに對して反作用的・還歸的なものであり、Wille に對して Sucht であり、Ja に對して Nein であり、神そのものに對して神の自然に外ならない。此の自然は、普通に聖書や教會の教義で説かれる Spirit としての神に對比される處の、神のうちにある永遠の

Nature であり、而もそれがある事によつてこそ、神は lebendig な顯示の神としてあり得る、従つてかゝる自然は、決して materialistic に解さるべきではなく、むしろ super-material な matter の源泉として、生命力・勢力の充満として理解されねばならない。^⑦ かゝる神の自然の源泉が神の第一の原理であるが、また神は、「永遠の精神的自然なくしては顯示し得ないであらう、といふのは、その中に於て神がその力として現れ給ふ自然の外では、無に歸するからである。」要するに、ベームの神に於ける自然は、「力」として、「産み出すもの、創り出すもの」としてあり、「神は、此の自然が自由の中に移り行くことによつてのみ、自ら顯はとなるのである。」^⑧ 即ち此處に、單に自らのうちに籠つた状態で、suchen 續けてゐる ungründlich な unfasslich な意志の中の本質が、あらはな、作用的・自覺的な、またそれ故に fasslich な意志となる。それは、Sucht を原因として、それに生かされつゝ、而も自らを見出してゐるが故に、その Fassung の故に、Sucht から自由であり、Sucht を支配する。が併し、否定の原理 Widerwille の原理は、消滅しはしない。その消滅は、再び永遠の靜に還ることを、神の顯示の止滅することを意味す

るからである。^{*} プートルーは言ふ、「無は神祕なる故に欲望であり、神祕は自身を明かにせんとする、即ち無は、何物かにならんとする欲望であるが、併しならんとする對象は漠然としたものではない、そのもの自身を明かにし、保持することである。それ故にかの不定なるものは、一面欲望であり、他面意志と呼ばれるものである、無意識の緩和されぬ欲望が意志を作る、が併し意志は欲望を調整し決定する。前者は運動と生命とを持ち、後者は獨立と命令する力とを持つ。かゝる二重性が、神の顯示の進展の起る凡ての對立の起源である。意志は神の人格性の元初であり、凡ゆる人格の基礎であると共に欲望は意志の essence であり body であり、永遠の自然の元初であり、感性的自然の基礎である。」^⑩

* 西谷啓治氏「神祕思想史」(岩波「哲學」第四輯) 參照

ベームの記述に就ては同書に負うた處が多かつた。

かゝるベームの考へ方は、三位一體説と容易に結びつき得るし、また辯證法とも深い關連を持つ様に思はれるが、ヘーゲルはベームを重視したにも拘らず、「ベームに於ては、體系的な敘述も、個物への眞の導入も期待出来ない」^⑪と述べてゐるのは、ベームには、ヘーゲル的辯證法に於けるが如き、存在の論理的形式としての傾向が

薄い故であらうか。また、ヘーゲルが神のうちにある自然の概念をむしろ軽視したのは、それを生産されたもの (Produkt) として考へたからであるといふ、バーデルの評が正しいとすれば、それは洵に當然のことと言ひ得る。ベーメに於ける Natur Gottes は、神の中にあつて神とは異なる力であり、單に否定的なもの、對立的なものに止まらず、すべてを創り、構成して行く處の積極的な原理でもあつた。このことは、まさしくシェリングに於ても當筈まる神のうちにある。自然は、神の實存の根據として、あらゆる意識に先立てる、それ自體 dunkel な根柢、「神に於ける無意識的なるもの」であるが、それはまた同時に、「神的な生成の、顯示の衝動」であり、それによつてこそ、神は、自らを自らのうちに産み出し得るのである。此の根柢は、「永遠なる一者が自らを産み出さんとして感ずる憧憬 (Sehnsucht) であり、此の憧憬は、神の存在の最初の發動であり、それに對應して、神そのものの中に一つの反射的な表象が生産される——それが神の「寫像」(Ebenbild) に外ならない。従つて、神のうちにある自然は、神の寫像への Begierde であり、統一を、悟性を生まんとする根柢——その故に、未だ悟性なき意志であり、また決して悟性の中に解消せし

められない暗い根柢である。固より此の根柢に於ても統一はあるのであるが、それは未だ調和なき chaotisch なる統一に過ぎない。始めにロゴスがある、併しロゴスは、その前にカオスに先立たれねばならぬ、悟性なきもの (根源的意志) から悟性 (意志の中の意志) が生れる、即ちロゴスは、「神のうち産み出された神自身であり、現實化された最初のものなのである」その意味に於てやはり始めにロゴスがなければならぬ。其處では、フィッシャーの言ふ如く、「根柢と目的とは本質上一であり、唯、根柢に於ては、目的に於て發展せるものが未發展のまゝだといふのみである。」即ち Natur in Gott は、Gott の根柢として Gott に先立つが、Gott なくしてはまた根柢たり得ない。「先行といふことに關して言へば、それは時間上の先行とも本質上の優先とも考へらるべきではなくして、神が自らのうちに自己の實存の内の根柢を包みつゝ、また一面神が根柢のプリウスたるべき、「相互に豫想し合ひ、一はいづれも他ではなく、然も他なくしてはあり得ぬ」關係に置かれる。それは、ベーメに於ける欲望と意志とが、「何れのものもより先ではなくして、兩者は互に無始であり、互にその一が他の原因である」といふ圓環的な關係の如くである。

フィッシャーが、「近代ヨーロッパ哲學の今迄に知らなかつた概念」⁽²⁾と賞讃する Natur in Gott の概念もベームに由來する（尤もベームに於ては、Natur in Gott なる語は見當らない、それは、バーデルを経てシェリングに傳へられたものと思はれる）しかし、シェリングの著書には、自由論に於てさへ、ベームの名は出て來ないし、また、彼に負うてゐる事も、シェリングは認めてゐない。（此の點は、マーテンセンも指摘してゐる）蓋し、それは、ベームに於ける神性の根底たる自然の概念が、やゝ不透明であつたことにも由るのであらうが、今一つは、シェリングに於ては、かゝる概念に至る必然性が存したことも、その理由となるであらう。即ち、同一哲學に於て、既に、自然は、現實存在の根底として、しかし現實存在ではないものとして解されてゐたからである。従つて、Natur in Gott の概念が、思辨的・抽象的、乃至は非主體的であるといふ非難（例へば、田邊元氏「懺悔道としての哲學」第四章）が現はれるのは、むしろ已むを得ないものである。

扱、神に於ける發展は、根源の統一から、諸力の分開——自然のうちに於ける悟性の第一の作用——を通じて、神の寫像へと動く。分開以前の諸力を統一させる處のものは、暗い意志であり、分開以後の諸力を統一させる處のものは、顯示的な意志である。しかも、繰返し述べる様に、神のうちにある自然は、決して無抵抗なも

の、無力なものではなくて、むしろ自身のうちへ籠らんとし、根柢に還らんとして、その顯示の段階に應じて抵抗する。（その抵抗は完全なる出産には必要なのである）⁽³⁾が併し結局は、永遠なる神の自己顯示に於て、いはゞ残りなく溶解せねばならない。あらゆる自然物は、その過程のうちにある。すべてのもの、具體的な統一體としての生 (Leben) は、重力と光との、暗い原理と明るい原理との融合に於て、Person として成立つ。一切の生産は、暗黒より、光明への出産である。⁽⁴⁾「絶對的に暗いものも絶對的に明るいものもあり得ない。すべては兩方であり、自然的・神的原理の兩方を持つてゐる。……従つて、あらゆる自然物に於ては、互に分解され難く結び合つてゐるのみならず、一つの統一を——絶對的な統一ではなく、程度は高かれ低かれ不完全な統一を形作つてゐる。最高度のものは、完全な變容であり、凡てのものを透徹する光であり、それは凡てを照し出し支配する神的な普遍意志 (Universalwille) である。」⁽⁵⁾さうして此の普遍意志に對する處のものは、未だ光との完全な統一に迄揚げられない限りの盲目的意志であり、根柢から由來して暗くある限りに於ける我意 (Eigenwille) であるが、それが逆に普遍意志を支配せんとし、秩序を顛倒さ

せる處に悪が成立つのである。

* ベーメに於ても固よりさうである。光の國は闇の國に對立せねばならぬ。「それ故に、闇の中の光が明らかにされねばならぬ。さもなければ、闇の中の光は動かず、如何なる實をも結ばないであらうから。」

* シュリングは、神のうちにある自然を屢々母胎に例へ、ベームは、作用的・顯示的意志を父神と一つである面として述べてあるが、父と母との關係に於て Leben を生むのは、此の場合單なる譬喩ではなくて、象徴的に考へられなくてはならない。

固より悪が可能である爲には、普遍意志と我意との必然的關係を錯倒させ、統一が破られ、ハルモニイが亂され得ることがなければならぬ。何故ならば、神の啓示の光の中には固より、我意、我欲、乃至は盲目的必然性の中にも悪は存しないのであるから。總じて、必然性のうちに悪はない。悪は自由^②に於てのみ存し得る。一般に、「特殊なる意志と普遍意志との方向が分離する分岐點に個體が置かれると其處に自由が生ずる」さうしてかゝる位置にあるもの、即ち自由であるものは、人間のみなのである。何故ならば、「人間のうちには暗い原理の全力が存する。然もその同じ人間のうちに同時に光の全力が存するのである」^③。人間は、根柢から現はれたといふ點で

は、他の被造物一切と同様であり、神とは獨立の原理を持つが、また自己意識的存在として精神 (Geist) —— それは、暗い原理が光に變貌されることによつて、人間のうちに昇つて來る——を有する。人間に於ける特殊意志 (Partikular-wille) は、自體に於ては、根元の意志即ち悟性と一つであるが故に、人間のみが言葉を、光と闇との統一を有する。人間は、自然があらうとする處のものであり、また自然から自然を超えて、被造物的なるものから超被造物的なるものへ至らんとする處のものであり、神の顯示が彼に於て始めて現實化し、彼に於てのみ神は世を愛し給ふ。即ち人間はかくして persönlich なのである。「自然的な個體としては人間は selbstisch であり、自己意識的な存在としては geistig であり、精神的自我性としては persönlich である。即ち自然的個體性と意識との統一が精神の存在を作りあげ、精神的なるものに迄高められた自我性が人格性なのである。」^④さうして此の人格のうちにこそ、自然を超える處のものが、また前述の自由が存するのである。即ち、人間は我性的な特殊な存在者としては精神であり、また我性は精神であることによつて、光の原理からも暗い原理からも自由である。従つて、「人間の意志のうちで、精神的となつ

た我性が光から分離するに至る、即ち神に於ては解き離すことの出来ない兩原理が、解き離されるのである。^⑩

それ故にまた、人間に於ける我意は、最早自然に於けるが如く、盲目的な道具として普遍意志に結び合はされてゐるものではなくて、それから離れ、それを覆し、中心の秩序を顛倒させ得る——かゝる我意の昂揚が悪に外ならない。従つて悪は、我意が中心意志にとつて代らんとし、個別的なるものが普遍的なるものを従屬せしめんとし、人間が神の座に着かんとする時に成立する。その意味で、悪は決して消極的なるものではなくして、積極的な力なのである。併し人間の場合、人間が特殊意志を持つ以上、それと普遍的意志との結合は、本來的には一つの矛盾でありながら、それは普遍的意志と關はらざるを得ず、しかも普遍的意志と全く同一になる場所、即ち中心には止まり得ない。「何故ならば、すべての意志の最も純粹な本質である此の中心は、凡ゆる特殊の意志にとつては、焼き亡ぼさうとする火である。その中に生きるためには、人間はすべての我性に死ななければならぬ。」人間が生ある以上、いはゞ生そのものの不安が人間を追ひ遣つて、中心からの離脱を、悪を、敢て行はしめるのである。人間の罪性は此處に由來する。而も、かゝる必

然的普遍性の存するにも拘らず、一般に、罪性はその行為者の責任でなければならぬ。根柢が悪そのものになることのない限りに於て、悪は飽くまでも人間の責任に於て爲されたのであり自由に於て人間の選んだものなのである。要するに、「人間が自らのうちに、善惡に對して同様に自己活動の源泉を持つてゐること、人間に於ては、原理の拘束が必然的なものでなく自由なものであること、人間が分岐點に立つてゐること、此等のことからのみ惡の可能性は説明され得る。」さうしてまた、前述の善をも惡をもなし得る能力としての自由の概念は、此處に於てのみ明らかに理解されねばならないであらう。

シェリングが我性の昂揚に於て惡を考へたこと、そしてその我性は最も深い暗い根柢に基づくこと、更にまた、惡を犯すのは人間の自由によ來しながらも、それは殆ど打ち克ち難い必然性を持つが如く思はれること、しかもそれが神の顯示、完全に善なるものの現成の爲に不可缺であること——此等は、宗教的・實存的立場に於ける人間の問題と深く繋がつてゐると考へられる。といふのは、我々は、我々が惡を斥け善を貫かんとする確信を持つことによつてのみ、道德的心情を把持し得るのであるが、またかゝる確信は、自體に於て、自らが自らを肯

定する高次の我性たるを免れない。前に述べた様に、カントの理性的立場に於て、悪が結局超克し得ざるものとして残つた理由は、まさしく此處に在つたと思はれる。シェリングはむしろ、カントとは異なる非合理主義の立場から、理性主義に於て克服し得ぬ悪の根本問題を捉へんとしたと言へよう。彼が元來主意主義的な立場に立ち、神の意志による處の世界を考へ、悪を此の神的秩序の顛倒なりとしたのは、——さうしてそれは、キリスト教に於ける正統的な解釋であらうが——その底に、「罪」の基底があつたのである。此等について、特に人間の「墮落」(Abfall)の問題については、ヘーメにも關聯し、また「哲學と宗教」を通じて、少しく詳しく考察しなければならぬが、これは次に譲らうと思ふ。

- ① Schelling; *Menschliche Freiheit* S. 237.
- ② Fischer; *ibid.*, S. 639.
- ③ Schelling; *ibid.*, S. 249. ff.
- ④ Boutroux; *Historical studies in philosophy.* p. 178.
- ⑤ Böhme; *De Elect. Grat. I.* 4.
- ⑥ Schelling; *ibid.*, S. 298.
- ⑦ Martensen; *Jacob Boehme* p. 30.
- ⑧ Böhme; *Drei Prinzipien göttliche Wesens.* II, 3.
- ⑨ " ; *De Elect. Grat. II.* 28.

- ⑩ F. Baader's *Werke* XIII. S. 65.
- ⑪ Boutroux; *ibid.*, p. 186.
- ⑫ Hegel; *Geschichte der Philosophie* 3 Theil. S. 277.
- ⑬ F. Baader's *Werk*. XIII. *ebenda.*
- ⑭ Fischer; *ibid.*, S. 641.
- ⑮ Schelling; *Menschliche Freiheit*, S. 251.
- ⑯ " ; " , S. 252.
- ⑰ " ; " , *ebenda.*
- ⑱ Fischer; *ibid.*, S. 642.
- ⑲ Schelling; *ibid.*, S. 250.
- ⑳ Böhme; *Myst. pansoph.* III.
- ㉑ Fischer; *ibid.*, S. 639.
- ㉒ Martensen; *ibid.*, p. xvii.
- ㉓ Schelling; *System meines Philosophie.* § 62.
- ㉔ Schelling; *Menschliche Freiheit*, S. 254.
- ㉕ Fischer; *ibid.*, S. 643.
- ㉖ Böhme; *Myst. magn.* 28, 67.
- ㉗ Fischer; *ibid.*, S. 644.
- ㉘ Schelling; *Menschliche Freiheit*, S. 255.
- ㉙ Fischer; *ibid.*, S. 645.
- ㉚ Schelling; *Menschliche Freiheit*, S. 257.
- ㉛ " ; " S. 273.
- ㉜ Fischer; *ibid.*, S. 647.

〔本稿は廿九年度文部省助成研究費による成果の一部である〕